

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱにおける実習園評価および自己評価の評価観点の差異に関する研究

著者	堀田 正央, 松崎 洋子
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	11
ページ	131-144
発行年	2011-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000508/



保育実習Ⅰ(保育所)と保育実習Ⅱにおける実習園評価および自己評価の評価観点の差異に関する研究

Differences of Evaluation Viewpoints between Two Internships at Day-care Centers Concerning Correlation between Self-evaluation and Nursery Teacher's Evaluation

堀田 正 央・松 寄 洋 子

HOTTA, Masanaka · MATSUZAKI, Yoko

I. 研究の背景

少子高齢化に伴う人口構造の変化と母親を始めとした子どもを持つ世帯の就労形態の変化から、日本における保育ニーズは急速な高まりを見せてきた。平成6年のエンゼルプランおよび緊急保育対策5か年事業の策定を皮切りに、次世代育成支援対策の一環としての保育所の多機能化が推進されるとともに、平成13年の児童福祉法一部改正による保育士の国家資格化により、保育士が求められる専門性や本来業務は急速に変化・拡大している現状がある。また平成22年策定の子ども子育てビジョンにおいてはチルドレンファーストの概念と共に保育士の重要性が強調され、今後の幼保一体化の流れに向けて就学前の子どもを対象とした保育・教育のあり方自体が再構築され、就学前保育・幼児教育の専門職の位置づけも今後大きく変わっていく可能性がある。

この様な状況の中で、各指定保育士養成校においては平成15年12月9日付(平成22年7月22日一部改正)厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成校の指定及び運用の基準について」に基づき養成課程の科

目設置や保育実習の実施を行い、平成17年社団法人全国保育士養成協議会によって提案された「保育実習指導のミニマムスタンダード」等を参考にしながら、専門性の高い保育士養成にむけた保育実習のシステム構築を目指している。

一方で「保育実習指導のミニマムスタンダード」において特に強調されてきた指定養成校と保育所との協働は必ずしも十分とは言えず、指定養成校の保育実習の目標・方法・内容の設定や保育実習指導に現場の知見やニーズが十分に活かされていない場合や、同一の目標・方法・内容に基づきながら保育所において実習の形態や指導・評価の方法に差異があることが先行研究においても指摘されてきた。

本研究は、保育実習Ⅰ(保育所)の実習園評価および自己評価について、相対的に高い評価のケースにおいて保育実習のあり方がそれぞれ異なるという仮説の基に分析を行い、高評価への要因を明らかにしていくことで、指定保育士養成校と保育士養成課程所属の学生、実習先保育所の協働を促進し、より良い保育実習のシステムを構築していくことへの一助

キーワード：保育実習、自己評価、実習園評価

Key words : internship at day-care center, self-evaluation, nursery teacher's evaluation

とすることを目的とした。

Ⅱ. 方法

1) 調査対象と調査方法

首都圏私立大学において2011年3月に保育実習Ⅱ事後指導を受講した3年生（43名、97.3%）および4年生（1名、2.7%）の計44名（男性：11名、25%、女性：33名、75%）を対象とした。集合式質問紙調査として事後指導の中で「実習園評価票」と同一の書式の「自己評価票」、実習日程や責任実習の概要および指導者からの指摘事項等に関する「実習報告書」の2つの調査票を記入・作成した。欠席者について別途個別に記入・作成を依頼し、最終的な回収率は100%であった。また2010年に行われた保育実習Ⅰ（保育所）の「実習園評価票」、「自己評価票」、実習報告書について遡って対象者全ての記録を得た。欠損値の処理等の後、44票全てを分析に投入した。

2) 実習の種類と実習期間

対象の所属大学においては平成15年12月9日付（平成22年7月22日一部改正）厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設における保育実習実施基準について」の実施基準（以下実習実施基準とする）で定められている保育実習Ⅰ（保育所）の科目名を保育実習Ⅰ（保育所）、保育実習Ⅰ（施設）を保育実習Ⅱ（施設）、保育実習Ⅱを保育実習Ⅲと設定している。本研究では表記の混乱を防ぐために実習実施基準における名称に統一した。対象が保育実習Ⅰ（保育所）を行ったのは23名について2010年2月、21名について2010年9月であった。また保育実習Ⅱについては全員が2011年2月に実習を実施した。全ての実習について実習期間は12日間であり、保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱの

実習園が同一であったケースは4例（9.1%）であった。

3) 分析方法

実習報告書については、1. 保育実習（保育所）と保育実習Ⅱの実習園の重複の有無、2. 保育実習Ⅲ実習期間中の所属クラス、3. 保育実習（保育所）における指導案を伴った部分実習の日程、4. 保育実習Ⅲにおける責任実習の日程と指導案の有無について集計を行った。

実習園評価および自己評価は、総合評価として優・良・可・不可の4段階の順序尺度、項目別評価として5（特に良い）・4（良い）・3（普通）・2（努力が必要）・1（特に努力が必要）の5段階の順序尺度による評価となっている。保育実習Ⅰ（保育所）、保育実習Ⅱの双方についてそれぞれの評価の分布を示すと共に、総合評価について優・良の肯定的評価を得た群を「肯定評価群」、それ以外の群を「非肯定評価群」と定義した。同様に各項目評価を5・4の肯定的評価を1、それ以外を0と定義した2値データに加工した上で、総合評価の各群とのクロス集計によるカイ二乗検定を行った。また保育実習Ⅰ（保育所）の実習園評価と自己評価、保育実習Ⅱの実習園評価と自己評価、保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱの実習園評価、保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱの自己評価の4つの組み合わせについて、5段階の順序尺度で捉えられた各項目評価の差異をWilcoxonの符号付き順位和検定によって検討した。

Ⅲ. 結果

1) 保育実習Ⅰ（保育所）および保育実習Ⅱの実習園評価における総合評価の分布（図1）
保育実習Ⅰにおいて70.5%、保育実習Ⅱで

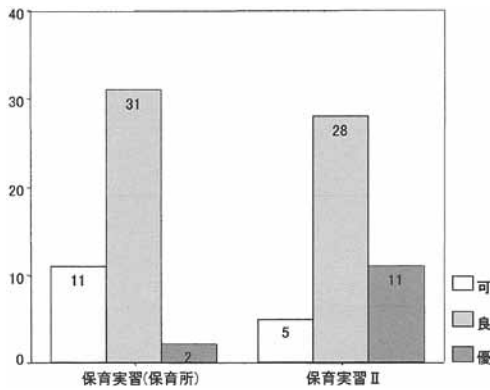


図1 保育実習（保育所）および保育実習Ⅱの園評価（N=44）

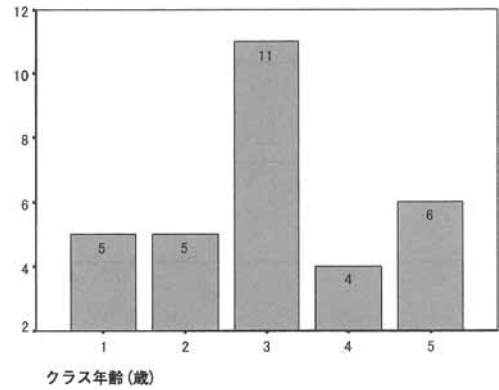


図2 保育実習Ⅰ（保育所）における指導案を伴う部分実習の実施クラス年齢（N=31）

63.3%とどちらの実習においても最も多くの割合を占めたのは良評価となった。優評価は保育実習Ⅰで4.5%に過ぎなかったものが、保育実習Ⅱでは25.0%と約5.6倍に増加した。可評価については保育実習Ⅰで25%だったものが、保育実習Ⅱでは11.4%と前回実習の半分以下（45.6%）に減少した。双方の実習を通じて不可評価を受けた者はいなかった。

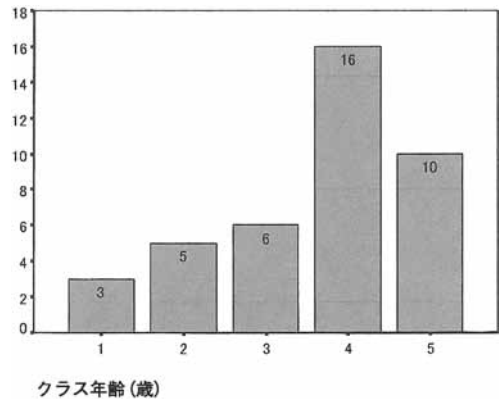


図3 保育実習Ⅱにおける責任実習の実施クラス年齢（N=40）

2) 指導案を伴った部分実習・責任実習の実施クラス年齢、および実習開始日から責任実習が行われるまでの日数（図2、図3、図4）

保育実習Ⅰにおいて指導案を伴う部分実習が行われのは31ケース（70.5%）であった。その中で35.5%と最も多くの割合を占めたクラス年齢は3歳であり、次いで1歳と2歳の16.1%、5歳の15.2%となり、4歳で実施されていたのは12%であった。

保育実習Ⅱでは、40ケース（90.9%）が指導案を伴う責任実習を行っていた。その中で40.0%が4歳クラスで責任実習を実施しており、ついで5歳（25.0%）、3歳（15.0%）、2歳（12.5%）、1歳（7.5%）となっていた。ま

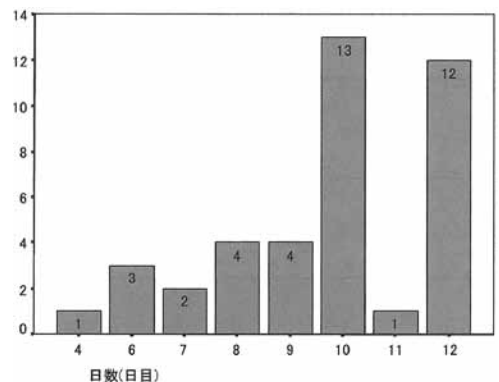


図4 保育実習Ⅱにおける実習開始日から責任実習実施日までの日数（N=40）

た責任実習が行われるまでの日数については、10日目（32.5%）と最終日である12日目（30%）で半数以上を占め、4日目から12日目まで全ての日数に分布していた。保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱに関わらず、指導案の作成や実施クラス、実施までの日数について実習生の希望が反映されていたかについては未調査である。

3) 保育実習Ⅰ（保育所）、保育実習Ⅱの実習園評価および自己評価における項目評価分布（表1）

各実習の実習園評価および自己評価における項目評価分布について、各項目評価は5段階の順序尺度で行われたため、分布は中央値（50パーセンタイル値）、第一四分位数（25パーセンタイル値）、第三四分位数（75パーセンタイル値）によって把握した。

「実習態度」のカテゴリでは、保育実習Ⅰ（保育所）の実習園評価と自己評価について、9

項目中5項目で後者が高い中央値を示している一方、保育実習Ⅱでは自己評価の方が高い中央値を示した項目は2項目に留まり、逆に2項目が実習園評価の方が高い結果となった。2つの実習の実習園評価では、保育実習Ⅱにおいて5項目がより高い中央値を示し、保育実習Ⅰの方が高い項目は無かった。2つの実習の自己評価では、それぞれ1項目がより高い中央値を示した。

「子ども理解」のカテゴリでは、保育実習Ⅰ（保育所）の実習園評価と自己評価について、5項目中3項目で後者が高い中央値を示し、保育実習Ⅱでは自己評価の方が高い中央値を示した項目は1項目のみだった。2つの実習の実習園評価では、全ての項目で同一の中央値をとった。2つの実習の自己評価では、1項目についてのみ保育実習Ⅰ（保育所）の方が高かった。

「保育理解」のカテゴリでは、保育実習Ⅰ（保

表1 保育実習（保育所）と保育実習Ⅱの園評価および自己評価における項目毎の評価値分布(N=44)

カテゴリ	項目	保育実習Ⅰ園評価			保育実習Ⅰ自己評価			保育実習Ⅱ園評価			保育実習Ⅱ自己評価		
		中央値	第一四分位数	第三四分位数	中央値	第一四分位数	第三四分位数	中央値	第一四分位数	第三四分位数	中央値	第一四分位数	第三四分位数
実習態度	時間や規則を守る	4.00	3.25	5.00	5.00	5.00	5.00	4.00	3.00	5.00	5.00	5.00	5.00
	礼儀、言葉遣いか丁寧である	3.00	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00	5.00	4.00	4.00	5.00
	環境整備を積極的に行う	3.00	3.00	3.75	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	4.00	3.00	5.00
	保育に適する体力がある	3.50	3.00	4.00	4.00	4.00	5.00	4.00	3.00	5.00	4.00	3.00	5.00
	職員との和が保てる	3.00	3.00	4.00	4.00	3.00	4.00	4.00	3.00	4.00	4.00	3.00	4.00
	実習に意欲的である	4.00	3.00	4.00	4.00	3.00	4.00	4.00	3.00	5.00	4.00	3.00	4.00
	細やかな配慮を心がける	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00
	積極的に助言・指導を求める	3.00	3.00	4.00	3.00	2.00	4.00	4.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00
	保育に適する体力がある必要な生活技能がある	3.00	3.00	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00
子ども理解	子どもに親しまれる	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	5.00	4.00	4.00	5.00	4.00	4.00	5.00
	子どもに理解できる言葉で話す	3.50	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.50	3.00	4.00	4.00	3.00	4.00
	偏りなく接する	4.00	3.00	4.00	4.00	3.00	4.00	4.00	3.00	4.00	4.00	3.00	4.00
	子どもの興味・関心を把握する	3.00	3.00	4.00	4.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00
	生活面の援助や指導ができる	3.00	3.00	3.00	3.50	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00
保育理解	発達に見合った対応をする	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00
	創意工夫をしながら子どもと関わる	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00
	実習園の保育の流れを理解する	4.00	3.00	4.00	4.00	4.00	5.00	4.00	3.00	4.00	4.00	4.00	5.00
	保育場面で豊かな表現ができる	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	3.75
	衛生面での配慮を心がける	3.00	3.00	4.00	4.00	4.00	5.00	3.00	3.00	4.00	4.00	3.00	5.00
保育理解	安全面での配慮を心がける	3.00	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00	3.00	4.00	4.00	3.00	4.00
	生活援助や指導が適切である	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00
	個人情報への守秘義務を心がける	3.00	3.00	4.00	5.00	4.00	5.00	4.00	3.00	4.00	5.00	4.00	5.00

育所）の実習園評価と自己評価について、6項目中3項目で後者が高い中央値を示し、保育実習Ⅱも同一の3項目についてより自己評価が高い結果となった。2つの実習の実習園評価では、保育実習Ⅱにおいて1項目のみがより高い中央値を示した。2つの実習の自己評価では、全ての項目で同一の値となった。

全カテゴリを通じて保育実習Ⅰ（保育所）では自己評価と比較して実習園評価の方が高い中央値を示した項目は無く、保育実習Ⅱでは6項目で自己評価が高い一方で実習園評価の方が高かったのは2項目に留まった。2つの実習の実習園評価では6項目で保育実習Ⅱの方が中央値が高く、保育実習Ⅰ（保育所）の方が高い項目は無かった。2つの実習の自己評価では1項目のみで保育実習Ⅱの方が高く、3項目で保育実習Ⅰ（保育所）の方が高い値を取った。

4）保育実習（保育所）および保育実習Ⅱにおける総合評価による項目別評価の差異（表2）

2つの実習の総合評価が肯定的な評価であった群とそれ以外の群における項目別評価の差異を表2に示す。保育実習Ⅰ（保育所）において、肯定評価群（33名）の50%以上が肯定的な評価を受けていた項目は、「時間や規則を守る（84.8%）」、「礼儀、言葉遣いが丁寧である（60.6%）」、「保育に適する体力がある（54.5%）」、「実習に意欲的である（72.7）」、「子どもに親しまれる（87.9%）」、「子どもに理解できる言葉で話す（63.6%）」、「偏りなく接する（66.7%）」、「実習園の保育の流れを理解する（63.6%）」の8項目となっていた。カイ二乗検定の結果、非肯定評価群と有意な差があったのは、「保育に適する体力がある」を除いた上記の7項目に加え、「積極的に助言・指導を求める（42.4%）」、「衛生面での配慮を心

表2 保育実習（保育所）および保育実習Ⅱにおける総合評価による項目別評価の差異（N=44）

カテゴリー	項目	保育実習（保育所）(N=44)				保育実習Ⅱ (N=44)			
		肯定評価群(n=33)		非肯定評価群(n=11)		肯定評価群(n=39)		非肯定評価群(n=5)	
		n	%	n	%	n	%	n	%
実習態度	時間や規則を守る	28	84.8	5	45.5 *	28	71.8	3	27.2
	礼儀、言葉遣いが丁寧である	20	60.6	3	27.2 **	29	87.9	0	0 **
	環境整備を積極的に行う	11	33.3	0	0.0 *	16	41.0	0	0.0
	保育に適する体力がある	18	54.5	4	36.4	22	56.4	4	80.0
	職員との和が保てる	15	45.5	1	9.0	25	64.1	2	40.0
	実習に意欲的である	24	72.7	0	0.0 ***	28	71.8	0	0.0 ***
	細やかな配慮を心がける	6	18.2	0	0.0	17	43.6	0	0.0
	積極的に助言・指導を求める	14	42.4	0	0.0 **	23	59.0	1	20.0
	保育に適する体力がある必要な生活技能がある	9	27.2	0	0.0	14	35.9	0	0.0
子ども理解	子どもに親しまれる	29	87.9	5	45.5 **	31	79.5	4	80.0
	子どもに理解できる言葉で話す	21	63.6	1	9.0 **	21	53.8	1	20.0
	偏りなく接する	22	66.7	2	18.2 **	26	66.7	2	40.0
	子どもの興味・関心を把握する	15	45.5	2	18.2	17	43.6	1	20.0
	生活面の援助や指導ができる	9	27.2	0	0.0	14	35.9	0	0.0
	発達に見合った対応をする	8	24.2	0	0.0	14	35.9	0	0.0
	創意工夫をしながら子どもと関わる	5	15.2	0	0.0	15	38.5	0	0.0
保育理解	実習園の保育の流れを理解する	21	63.6	2	18.2 *	26	66.7	3	60.0
	保育場面で豊かな表現ができる	4	12.1	1	9.0	13	33.3	1	20.0
	衛生面での配慮を心がける	15	45.5	1	9.0 *	16	41.0	0	0.0
	安全面での配慮を心がける	14	42.4	0	0.0 **	15	38.5	0	0.0
	生活援助や指導が適切である	4	12.1	0	0.0	13	33.3	0	0.0
	個人情報守秘義務を心がける	15	45.5	3	27.2	22	56.4	1	9.0

* : p<0.05, ** : p<0.01, *** : p<0.001
フィッシャーの直接法による

がける（45.5%）」、「安全面での配慮を心掛ける（42.4%）」の3項目の計10項目となっていた。一方で、「細やかな配慮を心がける（18.2%）」、「創意工夫しながら子どもと関わる（15.2%）」、「保育場面で豊かな表現ができる（12.1%）」、「生活援助や指導が適切である（12.1%）」では、総合評価では肯定的に評価された群においても項目毎の評価で肯定的に評価されていたケースが20%を下回る結果となっている。

保育実習Ⅱにおいて肯定評価群（39名）の50%以上が肯定的な評価を受けていた項目は、保育実習Ⅰ（保育所）における8項目に加え、「積極的に助言・発言を求める（59.0%）」、「個人情報守秘義務を心がける（56.4%）」の2項目の計10項目となった。非肯定評価群との有意差は、「礼儀・言葉遣いが丁寧である」「実習に意欲的である」の2項目においての

み見られた。

肯定評価群間では、「時間や規則を守る」、「子どもに理解できる言葉で話す」の2項目が同じ割合を示した他、全ての項目において保育実習Ⅱの方が各項目を肯定的に評価されている割合が高かった。特に肯定評価群の内部でさえ保育実習Ⅰで項目別に肯定的な評価を受けたケースが20%を下回った4つの項目については保育実習Ⅱでは「細やかな配慮を心がける（51.5%）」、「創意工夫しながら子どもと関わる（45.5%）」、「保育場面で豊かな表現ができる（39.4%）」、「生活援助や指導が適切である（39.4%）」全ての項目で25ポイント以上と大幅な向上を見せている。

5) 保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの実習園評価における項目毎の評価値変化（表3）

22項目の評価項目全てにおいて保育実習Ⅱ

表3 保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱの園評価における項目毎の評価値変化（N=44）

カテゴリ	項目	正の順位a		同順位b		負の順位c		P値d
		n	%	n	%	n	%	
実習態度	時間や規則を守る	16	36.4	13	29.5	15	34.1	0.635
	礼儀、言葉遣いが丁寧である	19	43.2	21	47.7	4	9.0	0.004 **
	環境整備を積極的に行う	11	25.0	29	65.9	4	9.0	0.032 *
	保育に適する体力がある	19	43.2	13	29.5	12	27.3	0.222
	職員との和が保てる	22	50.0	16	36.4	6	13.6	0.005 **
	実習に意欲的である	16	36.4	21	47.7	7	15.9	0.042 *
	細やかな配慮を心がける	19	43.2	20	45.5	5	11.4	0.003 **
	積極的に助言・指導を求める	19	43.2	17	38.6	8	18.2	0.046 *
子ども理解	保育に適する体力がある必要な生活技能がある	11	25.0	29	65.9	4	9.0	0.049 *
	子どもに親しまれる	14	31.8	19	43.2	11	25.0	0.592
	子どもに理解できる言葉で話す	13	29.5	19	43.2	12	27.3	0.601
	偏りなく接する	14	31.8	22	50.0	8	18.2	0.169
	子どもの興味・関心を把握する	10	22.7	28	63.6	6	13.6	0.32
	生活面の援助や指導ができる	16	36.4	24	54.5	4	9.0	0.005 **
	発達に見合った対応をする	13	29.5	28	63.6	3	6.8	0.011 *
保育理解	創意工夫をしながら子どもと関わる	14	31.8	27	61.4	3	6.8	0.007 **
	実習園の保育の流れを理解する	16	36.4	20	45.5	8	18.2	0.033 *
	保育場面で豊かな表現ができる	16	36.4	22	50.0	6	13.6	0.019 *
	衛生面での配慮を心がける	12	27.3	23	52.3	9	20.5	0.469
	安全面での配慮を心がける	12	27.3	25	56.8	7	15.9	0.251
	生活援助や指導が適切である	13	29.5	30	68.2	1	2.3	0.002 **
個人情報守秘義務を心がける	16	36.4	16	36.4	12	27.3	0.132	

a : 保育実習Ⅱの園評価が保育実習Ⅰの園評価の数値を上回ったケース

b : 保育実習Ⅱの園評価と保育実習Ⅰの園評価が同じ数値だったケース

c : 保育実習Ⅱの園評価が保育実習Ⅰの園評価の数値を下回ったケース

d : Wilcoxonの符号付き順位和検定による

*p<0.05, ** p <0.01, *** p <0.001

の評価が保育実習Ⅰの評価よりも高いケースの数が低いケースの数を上回る結果となった。また「子どもの興味・関心を把握する(正の順位:22.7%、負の順位:13.6%)」を除いた全ての項目で25%以上のケースが保育実習Ⅱにおいて評価が向上していた。逆に保育実習Ⅰから評価が落ちたケースの割合が25%を超えたのは「保育に適する体力がある(正の順位:43.2%、負の順位:27.3%)」、「子どもに親しまれる(正の順位:31.8%、負の順位:25.0%)」、「子どもに理解できる言葉で話す(正の順位29.5%、負の順位:25.0%)」だったが、その全ての項目においても評価が向上したケースの方が多かった。

6) 保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの自己評価における項目毎の評価値変化(表4)

保育実習Ⅱの評価が保育実習Ⅰの評価より

も高いケースの数が低いケースの数を上回ったのは6項目に過ぎず、16項目で保育実習Ⅱの評価が保育実習Ⅰの評価よりも低いケースの数が高いケースの数を上回った。保育実習Ⅰよりも保育実習Ⅱの評価がより高かったケースの数が低かったケースの数を上回った項目の内、「礼儀、言葉遣いが丁寧である(正の順位:34.1%、負の順位:6.8%)」、「環境整備を積極的に行う(正の順位:45.5%、負の順位:15.9%)」では有意差がみられた。同様に保育実習Ⅰよりも保育実習Ⅱの評価が低かったケースの数が高かったケースの数を上回った項目では、「衛生面での配慮を心がける(正の順位:25.0%、負の順位:43.2%)」、「個人情報の守秘義務を心がける(正の順位:11.4%、負の順位:34.1%)」において有意差が見られた。

表4 保育実習Ⅱと保育実習Ⅰ(保育所)の自己評価における項目毎の評価値変化(N=44)

カテゴリ	項目	正の順位a		同順位b		負の順位c		P値d
		n	%	n	%	n	%	
実習態度	時間や規則を守る	9	20.1	30	68.2	5	11.4	0.237
	礼儀、言葉遣いが丁寧である	15	34.1	26	59.1	3	6.8	0.016 *
	環境整備を積極的に行う	20	45.5	17	38.6	7	15.9	0.006 **
	保育に適する体力がある	12	27.3	17	38.6	15	34.1	0.477
	職員との和が保てる	13	29.5	18	40.9	13	29.5	1.000
	実習に意欲的である	11	25.0	22	50.0	11	25.0	0.850
	細やかな配慮を心がける	11	25.0	22	50.0	15	34.1	0.439
	積極的に助言・指導を求める	21	47.7	9	20.1	14	31.8	0.189
	保育に適する体力がある必要な生活技能がある	11	25.0	14	31.8	19	43.2	0.157
子ども理解	子どもに親しまれる	7	15.9	25	56.8	12	27.3	0.322
	子どもに理解できる言葉で話す	10	22.7	16	36.4	18	40.9	0.068
	偏りなく接する	11	25.0	21	47.7	12	27.3	0.885
	子どもの興味・関心を把握する	8	18.2	24	54.5	12	27.3	0.183
	生活面の援助や指導ができる	14	31.8	12	27.3	18	40.9	0.609
	発達に見合った対応をする 創意工夫をしながら子どもと関わる	14 13	31.8 29.5	17 21	38.6 47.7	13 10	29.5 22.7	0.610 0.741
保育理解	実習園の保育の流れを理解する	12	27.3	18	40.9	14	31.8	0.510
	保育場面で豊かな表現ができる	7	15.9	19	43.2	18	40.9	0.168
	衛生面での配慮を心がける	11	25.0	14	31.8	19	43.2	0.037 *
	安全面での配慮を心がける	12	27.3	13	29.5	19	43.2	0.216
	生活援助や指導が適切である 個人情報の守秘義務を心がける	15 5	34.1 11.4	12 24	27.3 54.5	17 15	38.6 34.1	0.822 0.032 *

a: 保育実習Ⅱの自己評価が保育実習Ⅰの自己評価の数値を上回ったケース

b: 保育実習Ⅱの自己評価と保育実習Ⅰの自己評価が同じ数値だったケース

c: 保育実習Ⅱの自己評価が保育実習Ⅰの自己評価の数値を下回ったケース

d: Wilcoxonの符号付き順位和検定による

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

7) 保育実習Ⅰの実習園評価と自己評価における項目毎の評価値比較（表5）

22項目21項目で自己評価が実習園評価よりも評価が高いケースの数が評価が低いケースの数を上回った。実習園評価が自己評価よりも評価が高いケースの数が評価が低いケースの数を上回ったのは、「発達に見合った対応をする（正の順位：27.3%、負の順位：31.8%）」であったが、有意差は見られなかった。またこの「発達に見合った対応をする」以外の全ての項目について、正の順位を示したケースの数の割合が35%を上回り、正の順位を示したケースの数が50%以上の項目だけでも7項目に及んだ。

8) 保育実習Ⅱの実習園評価と自己評価における項目毎の評価値比較（表6）

22項目中11項目で自己評価が実習園評価よりも評価が高いケースの数が評価が低いケースの数を上回った。有意差が見られたのは「時間や規則を守る（正の順位：52.3%、負の順位：4.5%）」、「環境整備を積極的に行う（正の順位：52.3%、負の順位：18.2%）」、「実習園の保育の流れを理解する（正の順位：45.5%、負の順位：13.6%）」、「衛生面での配慮を心がける（正の順位：47.7%、負の順位：15.9%）」、「安全面での配慮を心がける（正の順位：47.7%、負の順位：15.9%）」、「個人情報守秘義務を心がける（正の順位：52.3%、負の順位：11.4%）」となっていた。

IV. 考察

1) 保育実習Ⅰ（保育所）および保育実習Ⅱの実習園評価における総合評価の分布

統計学的な有意差こそ認められなかったものの、保育実習Ⅱの実習園総合評価は保育実

習Ⅰとくらべ、優評価が5倍以上に増加しつつ可評価が1/2未満に減少しており、明らかな向上を見せている。同一園での実習だったケースが4例（9.1%）に過ぎず、また参考資料に示した様に評価観点としての実習の目標自体が異なることから、保育実習Ⅰでの取組みのあり方が参照基準としてバイアスになっている可能性は低く、独立した評価としての向上であったことが考えられる。今回行った評価票における各項目評価からの実習期間中の取組みのあり方の検討に加え、今後は事前指導を含めて保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの間における学生の学びを定性的に分析することで、保育実習Ⅰから保育実習Ⅱへのより良い知識や実践知の積み上げ方を明らかにしていくことができるのではないかと考える。

2) 指導案を伴った部分実習・責任実習の実施クラス年齢、および実習開始日から責任実習が行われるまでの日数

特に部分実習については大学・実習生と実習園の間で具体的な定義が共有されていない可能性があり、今回は指導案を立案・実践したケースのみを取り上げた。部分実習では3歳、責任実習では4歳と5歳の年齢クラスを中心に指導案が作られており、仮説を支持する結果となった。保育実習Ⅱで特にクラス年齢の偏りが大きかったのは、4、5歳がより複雑な計画が立案・実践できるクラスであること他に、固定クラスでの実習が多く実習自体が4、5歳児クラスでしか行われなかったことが考えられる。

保育実習Ⅱにおける実習開始から責任実習までの日数は、10日目、12日目が多かった。期間中の経験の総括として、子どもの様子をより把握でき、関係性が構築可能な時期に行

表5 保育実習Ⅰ（保育所）の園評価と自己評価における項目毎の評価値比較（N=44）

カテゴリ	項目	正の順位a		同順位b		負の順位c		P値d
		n	%	n	%	n	%	
実習態度	時間や規則を守る	25	56.8	14	31.8	5	11.4	0.001 ***
	礼儀、言葉遣いが丁寧である	18	40.9	17	38.6	9	20.5	0.017 *
	環境整備を積極的に行う	17	38.6	18	40.9	9	20.5	0.127 *
	保育に適する体力がある	26	59.1	8	18.2	10	22.7	0.014 *
	職員との和が保てる	23	52.3	13	29.5	8	18.2	0.012 *
	実習に意欲的である	19	43.2	12	27.3	13	29.5	0.263
	細やかな配慮を心がける	19	43.2	16	36.4	9	20.5	0.059
	積極的に助言・指導を求める	18	40.9	9	20.5	17	38.6	0.155
	保育に適する体力がある必要な生活技能がある	20	45.5	19	43.2	5	11.4	0.036 *
子ども理解	子どもに親しまれる	16	36.4	19	43.2	9	20.5	0.039 *
	子どもに理解できる言葉で話す	20	45.5	17	38.6	7	15.9	0.025 *
	偏りなく接する	20	45.5	10	22.7	14	31.8	0.245
	子どもの興味・関心を把握する	16	36.4	19	43.2	9	20.5	0.111
	生活面の援助や指導ができる	20	45.5	10	22.7	14	31.8	0.132
	発達に見合った対応をする	12	27.3	18	40.9	14	31.8	0.903
保育理解	創意工夫をしながら子どもと関わる	17	38.6	17	38.6	10	22.7	0.116
	実習園の保育の流れを理解する	27	61.4	13	29.5	4	9.1	0.000 ***
	保育場面で豊かな表現ができる	17	38.6	18	40.9	9	20.5	0.053
	衛生面での配慮を心がける	28	63.6	14	31.8	2	4.5	0.000 ***
	安全面での配慮を心がける	25	56.8	15	34.1	4	9.1	0.000 ***
	生活援助や指導が適切である	17	38.6	19	43.2	8	18.2	0.046 *
個人情報の守秘義務を心がける	35	79.5	5	11.4	4	9.1	0.000 ***	

a : 保育実習の自己評価が保育実習の園評価の数値を上回ったケース

b : 保育実習の自己評価と保育実習の園評価が同じ数値だったケース

c : 保育実習の自己評価が保育実習の園評価の数値を下回ったケース

d : Wilcoxonの符号付き順位和検定による

*p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

表6 保育実習Ⅱの自己評価と園評価における項目毎の評価値比較（N=44）

カテゴリ	項目	正の順位a		同順位b		負の順位c		P値d
		n	%	n	%	n	%	
実習態度	時間や規則を守る	23	52.3	19	43.2	2	4.5	0.000 ***
	礼儀、言葉遣いが丁寧である	18	40.9	13	29.5	13	29.5	0.245
	環境整備を積極的に行う	23	52.3	13	29.5	8	18.2	0.012 *
	保育に適する体力がある	16	36.4	17	38.6	11	25.0	0.136
	職員との和が保てる	11	25.0	19	43.2	14	31.8	0.821
	実習に意欲的である	13	29.5	14	31.8	17	38.6	0.583
	細やかな配慮を心がける	8	18.2	23	52.3	13	29.5	0.106
	積極的に助言・指導を求める	12	27.3	12	27.3	20	45.5	0.102
	保育に適する体力がある必要な生活技能がある	9	20.1	24	54.5	12	27.3	0.609
子ども理解	子どもに親しまれる	13	29.5	21	47.7	10	22.7	0.348
	子どもに理解できる言葉で話す	14	31.8	15	34.1	15	34.1	0.714
	偏りなく接する	11	25.0	21	47.7	12	27.3	0.870
	子どもの興味・関心を把握する	9	20.1	26	59.1	9	20.1	0.699
	生活面の援助や指導ができる	12	27.3	23	52.3	9	20.1	0.478
	発達に見合った対応をする	8	18.2	22	50.0	14	31.8	0.201
保育理解	創意工夫をしながら子どもと関わる	11	25.0	22	50.0	11	25.0	0.649
	実習園の保育の流れを理解する	20	45.5	18	40.9	6	13.6	0.023 *
	保育場面で豊かな表現ができる	10	22.7	20	45.5	14	31.8	0.167
	衛生面での配慮を心がける	21	47.7	16	36.4	7	15.9	0.006 *
	安全面での配慮を心がける	21	47.7	16	36.4	7	15.9	0.012 *
	生活援助や指導が適切である	13	29.5	17	38.6	14	31.8	0.615
個人情報の守秘義務を心がける	23	52.3	16	36.4	5	11.4	0.000 ***	

a : 保育実習Ⅱの自己評価が保育実習Ⅱの園評価の数値を上回ったケース

b : 保育実習Ⅱの自己評価と保育実習Ⅱの園評価が同じ数値だったケース

c : 保育実習Ⅱの自己評価が保育実習Ⅱの園評価の数値を下回ったケース

d : Wilcoxonの符号付き順位和検定による

*p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

われるケースが多いことが考えられ、仮説を支持する結果となった。11日目が極端に少ないのは曜日の配列の問題が考えられる。一方で4～7日の実習第1週で責任実習が設定されるケースも5例（15.0%）みられ、4例については責任実習の設定が無かった。

以上のことから、参考資料で示した保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの実習のあり方の違いと共に、期間中の中核的な内容と考えられる指導案をとともう部分・責任実習についても保育実習Ⅰと保育実習Ⅱで大きな違いがあることが明らかとなり、この点について事前指導等を通じて学生の認知を広めることが、保育実習Ⅰから保育実習Ⅱへのスムーズな積み上げに寄与するのではないかと考えられた。

3) 保育実習（保育所）および保育実習Ⅱにおける総合評価による項目別評価の差異 肯定評価群、非肯定評価群間で保育実習Ⅰと保育実習Ⅱを通じて有意な評価差がでた項

参考資料

	保育実習Ⅰ（保育所）	保育実習Ⅱ
目標	① 保育所の内容、機能等を保育所での体験を通して理解する。 ② 既習の教科全体の知識・技能を基礎として子どもへの理解を深めるとともに、これらを総合的に実践する応用力を養う。 ③ 保育士としての職業倫理と子どもの最善の利益の具体化について学ぶ。	① 保育所の保育を実践し、保育士として必要な資質・能力・技術を習得する。 ② 家庭と地域の生活実態に触れて、子どもや家庭の福祉ニーズに対する理解力、判断力を養うとともに、子育て支援に必要な能力を養う。
内容	① 保育所の役割、機能について理解する。 ② 保育の一日の流れを理解し、参加する。 ③ 子どもの観察やかかわりを通して乳幼児の発達を理解する。 ④ 保育所における保育課程・指導計画を理解する。 ⑤ 生活や遊びなどの一部分を担当し、保育技術を習得する。 ⑥ 職員間の役割分担とチームワークについて理解する。 ⑦ 保育記録や保護者とのコミュニケーションなどを通して、家庭や地域社会を理解する。 ⑧ 子どもの最善の利益を具体化する方法について学ぶ。 ⑨ 保育士としての職業倫理を具体的に学ぶ。 ⑩ 安全および疾病予防における配慮について理解する。	① 保育全般に参加し、保育技術を習得する。 ② 子どもの個人差について理解する。特に発達の遅れや生活環境に伴う子どものニーズを理解し、その対応について学ぶ。 ③ 指導計画を立案し、実際に実践する。 ④ 地域社会に対する理解を深め、連携の方法について学ぶ。 ⑤ 家庭との連携の実態をふまえた子どもの最善の利益への配慮を学ぶ。 ⑥ 保育士としての職業倫理を理解する。 ⑦ 安全および疾病予防における配慮について理解する。 ⑧ 保育所の保育士に求められる資質・能力・技術に照らし合わせて、自己の課題を明確にする。
方法（原則）	① 実習の第1段階では、子どもの発達の概況とそれに応じた保育内容を知るために、複数のクラスでの見学・観察実習を行い、保育を全体的に把握し、理解する。 ② 実習の第2段階では、第1段階の実習を継続しながら、固定クラスでの参加実習を行って理解をより深める。できれば、指導計画を立案して部分実習を体験する。 ③ 長時間保育を早朝、夕方各1回は経験する。 ④ 実習の全期間を通じて、保育者の仕事を積極的に手伝う。	① 固定クラスでの参加実習を実践することにより、保育を具体的に理解する。 ② 固定クラスの様子がおおむね把握できた段階で、指導計画を立案して責任実習（部分実習・全日実習）を体験する。 ③ 長時間保育を早朝、夕方各1回は経験する。 ④ 保育士の職務内容を理解するため、実習の全期間を通して保育士の仕事に積極的に参加する。

目は、「礼儀、言葉遣いが丁寧である」、「実習に意欲的である」といった実習態度に関する項目だった。保育実習Ⅰにおいては「子どもに親しまれる」、「子どもに理解できる言葉で話す」、「偏りなく接する」、「実習園の保育の流れを理解する」、「衛生面での配慮を心がける」、「安全面での配慮を心がける」といった添付資料における保育実習Ⅰの目標・内容に関する項目で有意な差が見られた。逆に「細やかな配慮を心がける」、「創意工夫しながら子どもと関わる」、「保育場面で豊かな表現ができる」、「生活援助や指導が適切である」といった具体的な実践知を問われる項目に関しては総合評価の肯定評価群においてすら項目別に肯定的評価を得たのは20%に留まり、保育実習Ⅰにおける評価観点は具体的な配慮や実践知に至らない実習態度や子どもへの接し方、衛生面や安全面等の基礎的な環境整備に関係していることが示唆された。

一方保育実習Ⅱでは保育実習Ⅰでの評価観

点に加え、「細やかな配慮を心がける」、「創意工夫しながら子どもと関わる」、「保育場面で豊かな表現ができる」、「生活援助や指導が適切である」といった具体的な配慮・実践知についても総合評価の肯定評価群は項目別でも高い評価を得ている割合が高く、添付資料の保育実習Ⅱにおける目標・内容と同様に、より具体的かつ高度な保育内容が評価観点として用いられていることが考えられた。

以上のことから、実習園評価における評価観点はそれぞれの実習において大学が設定した目標・内容とある程度の整合性を持ち、仮説以上に妥当性が高いことが考えられた。さらにより大学と実習園とで実習内容や評価の方法について連携を強めることで、実習評価の信頼性・妥当性を高めると共に、より良い実習のシステムを構築しながら、専門性の高い保育者の養成に繋げていくことができるのではないかと考えられた。

4) 保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの実習園評価における項目毎の評価値変化(表3)

全ての項目において正の順位のケースの数が負の順位のケースの数を上回り、総合評価を別にしても全体的な傾向として保育実習Ⅰよりも保育実習Ⅱの実習園評価が向上していることが明らかとなった。特に具体的な保育の知識・実践知が問われることが考えられる「細やかな配慮を心がける(正の順位:43.2%)」、「創意工夫しながら子どもと関わる(正の順位:31.8%)」、「保育場面で豊かな表現ができる(正の順位:36.4%)」、「生活援助や指導が適切である(正の順位:29.5%)」の項目については、全てが約30%以上のケースで評価が向上していた他、「職員との和が保てる(正の順位:50.0%)」、「積極的に助言・

指導を求める(正の順位:43.2%)」等、評価が向上したケースの割合が高い項目については、保育実習Ⅰの内容を踏まえ実習生が意識的に改善した実習態度を反映した項目となっていた。

当初の仮説では、評価観点の違いや評価基準自体が保育実習Ⅰに比べて保育実習Ⅱが厳しくなる可能性が高いことから高い評価に繋がらない可能性が考えられたが、その様な背景にも関わらず実習園評価は保育実習Ⅰよりも保育実習Ⅱの方が項目別に見ても大きく向上していることが明らかになった。今後、実習記録等における学生自身の考察・反省・目標設定等を質的に捉えることを含めて、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの接続のあり方を中心に高評価への要因を検討することの必要性が示唆された。

5) 保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの自己評価における項目毎の評価値変化(表4)

実習園評価とは対照的に、保育実習Ⅰよりも保育実習Ⅱの評価が低かったケースの数が高かった評価の数を上回った項目は16項目にも上った。特に「衛生面での配慮を心がける」、「個人情報の守秘義務を心がける」の2つの項目では、有意な差が認められた。この状況は、実習生自身の態度・知識・実践知が低くなったというよりも、保育実習Ⅰ事後においては達成感やそれぞれの内部での「頑張った」という気持が客観性よりも優位に働いた可能性があることと、実習生が保育実習Ⅰの経験を通じてより妥当性の高い評価観点を得、専門性としてはむしろ高まった結果、保育実習Ⅱの評価としては相対的に低い(厳しい)自己評価をつけて行ったのではないかと考えられる。この点は仮説に過ぎず、他の要因を検

討しながら検証して行きながら、適切な自己評価へ繋げて行く必要があると考える。

6) 保育実習Ⅰの実習園評価と自己評価における項目毎の評価値比較

22項目中21項目という大部分の項目について、自己評価の数値が実習園評価の数値を上回ったケースの割合が高い結果となった。先に述べて保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの自己評価の違いからも示唆された様に、保育実習Ⅰにおいては実習生の妥当性のある自己評価観点が育まれていない可能性が考えられる。7項目で50%以上のケースが正の順位となっており、園評価と自己評価の格差は深刻であると言える。「時間や規則を守る」といった比較的客観性を保ちやすいと考えられる項目についても、56.8%が実習園評価よりも高く自己評価を付けており、一学生や一社会人としてではなく専門職を目指す実習生としてどうかという意識を、事前指導等で十分に持っていない可能性が高い。適切な自己評価に基づいた反省・実践を実習期間に行える様、事前にしっかりとした指導を行うことで、保育実習Ⅰについてもより良い実習を行える余地があり、今後この点を具体的に考えていく必要があると思われた。

7) 保育実習Ⅱの実習園評価と自己評価における項目毎の評価値比較

自己評価の数値が実習園評価の数値を上回ったケースの割合が高い結果となった項目は丁度半数の11項目であり、保育実習Ⅰのそれと比較して半減している。このことから、保育実習Ⅰに比べて保育実習Ⅱにおいてはより明確な自己評価観点を持って実習ができている可能性が考えられた。さらに、「発達に見

合った対応をする」、「細やかな配慮を心がける」、「創意工夫しながら子どもと関わる」、「保育場面で豊かな表現ができる」、「生活援助や指導が適切である」といった保育実習Ⅱにおける目標・内容に係る具体的な知識・実践知に関わる項目については、「創意工夫しながら子どもと関わる」が同値（正の順位：25.0%、負の順位：25.0%）であった他は全ての項目で実習園評価の数値が自己評価の数値を上回る割合が高くなっており、実際は自己評価以上により良い評価を受けている状況が明らかとなった。今後、保育者としては自己評価の低さが必ずしも専門性の向上に繋がらないこともあると考えられ、中・長期的な実践を通じて自己評価についてより明確な評価観点を持ちながら妥当性と信頼性高めて行く必要性が考えられた。

V. まとめ

- ①実習園の総合評価については保育実習Ⅱは保育実習Ⅰに比べて向上していた。
- ②責任実習の実施形態や実施自体の有無を含め、実習の方法には各実習園で一定のばらつきがみられる。
- ③肯定的な総合評価を得た群とそれ以外の群における項目別評価の比較では、保育実習Ⅰについて、実習態度や子どもへの接し方、衛生・安全面等の基本的な環境構成に関する項目で肯定評価群が有意に高い割合を示し、これらの評価観点が総合評価に繋がっていることが考えられた。保育実習Ⅱにおいては「礼儀、言葉遣いが丁寧である」、「実習に意欲的である」以外の項目で両群に優位な差は見られなかったが、肯定群自体のケースの増加と共に、「細やかな配慮を心がける（51.5%）」、「創意工夫しながら子

どもと関わる(45.5%)」、「保育場面で豊かな表現ができる(39.4%)」、「生活援助や指導が適切である(39.4%)」で保育実習Ⅰと比べ25ポイント以上の大幅な上昇を見せており、これらの項目についての実習内容の向上が、相対的に高い総合評価に繋がっているのではないかと考えられ、実習園評価における保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの評価観点の違いが示唆された。

④総合評価の要因を省いた項目別評価の比較においても、保育実習Ⅱは保育実習Ⅰに比べて全体的に評価が向上する傾向を示し、特に「細やかな配慮が心がける(正の順位:43.2%)」、「創意工夫しながら子どもと関わる(31.8%)」、「保育場面で豊かな表現ができる(36.4%)」、「生活援助や指導が適切である(29.5%)」の項目については、全てが約30%以上のケースで評価が向上した。評価観点の違いと合わせ、実習生の知識・実践知の顕かな向上が示され、その内容についての今後の研究が望まれた。

⑤特に保育実習Ⅰにおいては自己評価の評価観点の妥当性が低い可能性が示唆され、このことが評価観点の違いにも関わらず保育実習Ⅰの総合評価が低い一因と考えられた。実習園評価と大学の保育実習にむけた目標・内容の整合性の高さと合わせ、実習生の保育実習Ⅰにおける目標・内容のより明確な把握と必要とされる保育の知識・実践知の向上が重要であることが考えられた。

VI. 提言

以上の結果を踏まえ以下の3点を提言する。

- ①共通した評価観点に基づいた実習が実習園からの総合評価の高さにも繋がることが考えられ、また実習のあり方について一定の

ばらつきが見られることから、実習依頼・事前指導の段階から保育実習の目標・方法・内容について大学・実習生・実習園が理解を共有すると共に、よりインタラクティブな連携をとって行く。

- ②保育実習Ⅰにおける総合評価や項目別評価は、実習園評価に比べ自己評価が相対的に高くなっている傾向が明らかとなった。実習生自身が妥当性のある評価に基づいた改善が困難な状況も考えられ、実習園評価の開示等を検討しながら妥当性のある事後の振返りを促すとともに、大学における事前指導において各授業との連携を基に、特に評価が低い項目に関する知識・実践知の向上を図る。

- ③保育実習Ⅰから保育実習Ⅱへの成果の積み上げは、保育実習Ⅱの評価から把握する限りにおいてはすでにある程度達成されていることが明らかとなった。今後は評価のみではなく具体的な内容の向上を実習記録等の成果物や事後のインタビュー等を通じて定量的・定性的に把握しながら、保育実習Ⅰから保育実習Ⅱへのより効果的な接続と積み上げの内容・方法を検討していく。

VII. 参考文献

- 1) 全国保育士養成協議会、保育実習指導におけるミニマムスタンダード、北大路書房、2007
- 2) 千葉弘明(2008)、「保育実習指導におけるミニマムスタンダード」を取り入れた保育実習指導のあり方について、千葉経済大学短期大学部紀要4、11-21
- 3) 湯浅頼佳(2011)、「保育実習指導のミニマムスタンダード」を基にした実習事前・事後指導についての考察、道都大学紀要共通教育学部(5)、71-16

- 4) 田中ゆき江、辻野順子 (2011)、学生の心的状況と保育実習評価の関連性について、関西女子短期大学紀要19、1-11
- 5) 佐野美奈 (2010)、保育実習（保育実習Ⅰ）と保育実習Ⅱの実践的学びによる教育的効果-2006年度から2008年度までの保育所実習（保育実習Ⅰ）と保育実習Ⅱの自己評価と現場評価の調査結果をもとに-、大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要9、203-217
- 6) 松本学 (2007)、教育実習・保育実習における学生自己評価と幼稚園評価・保育所評価の比較考察、国際学院埼玉短期大学研究紀要29、57-80
- 7) 榊原広美 (2007)、保育実習指導の内容に関する客観的分析、名古屋女子大学紀要53、189-195
- 8) 権藤真織 (2007)、保育実習における実習日誌内容の記述内容と実習成績との関連-学生自身による日誌の内容分析学習を通して -、近畿大学豊岡短期大学部紀要4、39-47
- 9) 高橋裕子、大瀧ミドリ、今村聡美 (2011)、幼稚園教育実習における事前準備の習熟度と事後の自己評価について-「教材研究」「子どもの気持ちの読み取り」「満足度」の観点から、東京家政大学研究紀要51 (1)、7-13
- 10) 田爪宏二、小泉裕子 (2009)、実習担当保育者の持つ実習生のイメージと実習生に期待する資質に関する検討、鎌倉女子大学紀要 (16)、13-23
- 11) 小藺江幸子 (2009)、保育実習自己効力感尺度作成の試み、淑徳短期大学研究紀要48、123-135